部隊に配属された日

koberyo1

世の中が戦争へ、戦争へと移り変わる時代に生まれ育った。
私は横須賀鎮守府から二度にわたって通達書を受理している。

初回は昭和十九年二月二十九日付けで二次検査を三重海軍航空隊で行うからというもの、二回目は昭和十九年四月十日付けで海軍甲種飛行兵に採用徴募するから横須賀海軍通信学校に七月九日に参着すべしというもので、今考えればちょうど終戦時の一年前に入隊したことになる。

所定の教育を受け、横須賀通信学校を無事卒業した十四期生それぞれの実施部隊に配属された。私たち十五名は正式の配属先がきまるまで、千葉の館山飛行基地で待機することになり、久里浜のランチ（小型の移動用の舟）に乗り込んだ。

短艇に入る頃は空は暗く、今にも台風がくるな、と思いながら空を仰いだ。出発を知らせる、ランチは静かにゆれながら久里浜を出港した。

久里浜と館山は目と鼻の先で至近距離を思っていたが、短艇は木の葉のごとくゆれだした。浦賀水道に入ったころから、と思う。船室のあかりがぼんやりついていて、「ペンキ塗りたて」の直後、そのもののシンナーの臭いがプンプンの状態だった。誰しもが不安の中、無口だった。波の中で舟がもがき苦しんでいるように感じさえした。

体が右に左にゆれる。シンナーの臭いで気分が重くなって船室でもどしそうになった。しばらくは我慢していたが、どうにも辛抱できず、甲板に出ようと思った。だが、帽子が風に飛ばされると感じ、帽子は船室に残し、外に出た。甲板に出るとロープをしっかりと両手でしっかりとつかみ、ゲイゲイとやった。

大粒の雨が顔にあたって痛い。強風と波は容赦なく足もとを洗う。半身ずぶぬれ状態で、ぐしゃぐしゃ靴から水があふれ出た。なんとも気分が悪い。

そうこうしている間もなく館山基地に着いた。木の葉のようにゆれた短艇から陸上に着いたホッとしながら申告したところ、兵舎の前で整列しろという。

実践部隊の配属直前の洗礼だった。もたもたと列を作った当直の班長は、「帽子の着用に問題がある」から気合を入れてやるという。鉄パイプで気合を入れるのである。これが日本海軍の特色である「精神教育」だった。

整列した十五名は、いわゆる「バッタ」と呼ばれる鉄パイプによる精神教育の洗礼をその時、はじめて浴びた。両足をぐっ、と開いて背を向けて立ち、バサッバサッと鈍い音が腰に食い込ん

[illegible]
でいく。船酔いとバッタの味を満喫させられたのである。

濡れた軍服を作業衣に取りかえ、用意されていた夕食を取った。大きなヤカンとスルメがでてきた。祝杯を上げろという。それぞれが湯呑み茶碗をもって乾杯した。大きなヤカンには日本酒が入っていた。

翌朝、基地の内部を見学することになり、案内を受けた。基地内には兵隊さんはいなかった。作業服を着用した整備員の人たち、それと眼についたのは大きな倉庫、それからコンクリートの広場は海につながっていた。波打ち際はコンクリートが海の中にあった。

基地には三日ぐらいいたかと思う。毎日、館山市内を見学して楽しい毎日だった。

ある日のことだった。全員に招集がかかった。博多航空隊に向け、出発するからの訓示があった。“二式大艇” に搭乗することになって全員おおよろこび、胸がわくわくした。

いよいよ出発の日がきた。晴天で風のない心地よい日だった。倉庫から飛行艇が小さな車輪で動いていた。私たちははじめて飛行機に乗ることになった。幼稚園の子供たちがよろこんで自動車に乗る光景である。

飛行機の内部は広々としていて竹で編んだ長椅子があった。軽量の装備である。小さな窓から外を見た。自分達の体は海の上にあった。船に乗っているようでもあった。

飛行艇は大きな音響をたてて大きく大きく輪を描くように海上の上を廻った。そのエンジンの音はそれはそれは今まで聞いたことのない音だった。艇は海から離れ、宙に浮かんだようだった。隣の者と会話はできないし、それぞれがはじめビックリした様子だったが、大きく輪を描きながら艇は上昇し、あの大きな倉庫が下に小さく見えた。

予定時間通り博多までの上空を飛んでいた。そしてドドンという音とともに着水していた。これが、まぎれもない官費旅行と心の中で思った。私たちは申告して九〇一空、旭部隊の一員として参着したのである。